Kwansei Gakuin University

マルコ福音書におけるイエスの「死」の意義の考察

——マルコ10：35－45と14：22－25の編集史的研究(1)[1]——

加　藤　善　治

問題設定

マルコ福音書のおけるイエスの「死」の意義を考察するにあたり、特にマルコ10：35～45と14：22～25を取り上げるのは、以下の理由による。

(1) マルコ福音書におけるイエスの「死」の意義について、「贖い（贖罪）」動機が持ち出されることが多い[2]。しかしマルコ福音書におけるイエスの「死」の出来事の本質の中に、「贖罪」の意味での「贖い」主題が見いだされるかについて、私見では2カ所を除くと、根拠がない[3]。

その2カ所とはマルコ10：45と14：22以下である。そこで両箇所を編集史的に分析することを通して、両箇所を編集した編集者マルコの意図を解明して、「罪とその贖い」によるイエスの死の解釈がマルコにおいて主張できるかを検証したい。

(2) W.Wrede[4]以来、「秘密」動機の解明を主軸として展開されてきたマルコ福音書研究は、マルコ福音書の本質をキリスト論に求めるのが一般的である。例えば4：10の「神の国の秘密」すら、J. Gnilkaによって「キリスト論の秘密」と説明されてしまうような強引さが支配的である[5]。

キリスト論を軸とする解釈は妥当である。しかし私はマルコ福音書はイエスとは誰であるかというキリスト論主題につきないと考える。私はかつて、このキリスト論を越える主題を明らかにするために「ユダヤ人・異邦人」動機から福音書全体を検討し、この動機がマルコ福音書全体の本質と関わっていることの確認を試みた。その中から見えてきたのが、イエスのガリラヤにおける神の

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

国宣教の開始から始まり、イエスの死、むしろイエス殺しと復活、そして復活後の弟子たちの宣教を経て、イエスの再臨とともに始まる神の国の完成を目指して展開するものとしてのイエスの歴史（＝マルコ福音書）理解である[6]。

本研究はその解明をめざす一環である。

Ⅰ　マルコ10：35－45

1．伝承と編集

a．10：41．42a

マルコ10：35－45において、比較的容易にマルコの編集作業の存在を確認できるのは41節全体と、イエスの言葉を導入する42節冒頭部である。

「*καί* ＋ *ἀκούω* 分詞形＋本動詞」の構文は比較的マルコに多い（NT ＝新約聖書22回のうち、Mk 10回；Mt 6回；Lk 3回）。特に、物語内部で新たに展開を告げる箇所にあたる3：21；6：29；10：47などでの用法がここと比較できる。

「定冠詞＋ *δέκα* 乃至 *δώδεκα*」によって弟子を表す表現は、使用頻度でマルコに特に多くない（Mk 10回；Mt 9回；Lk 6回）。1コリ15：5が示すとおり、この表現は受難物語伝承などを通してマルコに所与のものである。しかしマタイがマルコのこの表現に *μαθητής* や *ἀπόστολος* を付して使うのに比べて、マルコが3：16における「12人」制定以来、*οἱ δώδεκα* という形容詞の名詞的用法を一貫して用いていることは注目に値する（4：10；6：7；9：35；10：32）。*οἱ δέκα* という表現はこの用法から派生したものと判断できる。

「*ἤρξατο* ＋不定詞」の表現はマルコの使用頻度が目立つ（NT 49回のうち Mk 24回；Mt 6回；Lk 14回；Jn 1回)。その中には1：45；4：1；5：20などマルコの編集操作と判断できる箇所が多く含まれる。従ってここでもマルコの可能性が高い。

ἀνακτέω は新約聖書全体で7回のみと使用頻度が少ない動詞である。しかし Mk 3回；Mt 3回；Lk 1回と共観福音書に集中する。特にマルコを支

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

持しないが、しかし14：4で同じく弟子たちについて言われた表現がここに影響した可能性、また直前の10：14でのイエスについての使用との関連が顧慮されうる。

ヤコブとヨハネの兄弟を一組で用いることはマルコ的言語用法と見なすことができる。両者が同時に言及される箇所は新約聖書に20回あるが、そのうちMk 9回；Mt 3回；Lk 5回；Jn 0回；Act 2回とすでに頻度の点でマルコに目立つ。しかもペテロ、アンデレ兄弟と共に最初に招かれた兄弟としてイエスと行動を共にし（1：29）；5：27；9：2；13：3などマルコにとって特に重要な場面で言及されるからである。

42節冒頭の「*προσκαλέομαι* 分詞形＋本動詞」の構文は使用頻度ではマタイと並ぶが（Mt 7回；Mk 7回；Lk 3回；Act 6回、このうちMt 3回はマルコに依存)、マルコでは特にイエスが弟子または群衆を「呼び寄せて語る」場面で、この構文が好んで使われることが目立つ（Mk 3：23；7：14；8：34など）。さらにMk 7回のうち、8：1とピラトを主格とする15：43以外は、この構文の前に *καί* を先立たせ、本動詞として *λέγω* や *εἶπον* を用いた構文となっていることは注目できる。マタイにはこの形はマルコに依拠した15：10のみであり、ルカにもない。従ってマルコの手が強く認められる。

以上の考察により、41節全体、42節冒頭はマルコによるものと判断する。するとマルコが10：35節以下で手にした伝承は35節－40節と41節－45節と大きく二つの部分に分かれ、その二つを編集者マルコが構成したこととなる。

b．マルコ10：35－40

10：35－40において用語、文体などでマルコ的特色を見いだすことは容易ではない。例えばR. Bultmannは35－37節、40節を統一的に形成された伝承とみなした。38、39節は事後預言であるが、独立の伝承でなく三五節以下の伝承のために二次的に形成されたものとした。様式史的にはアポフテグマの中に数えられる(7)。これに対してJ. Gnilkaは「左」を表す言葉が37節と40節において異なること、40節の答えは厳かな35－37節の問いに対するものとしてふ

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

さわしくないなどの理由で、元来の伝承を35－38節のみに求め、「伝記的アポフテグマ」ととらえ、そして39節以下の文だけ二次的に拡大されたとする[8]。

まず気づくのは、35節以下から40節は、問いと答えがイエスと弟子の間の会話の形で全体として3度もやりとりされ、アポフテグマの構成としてはあまりに変則的なことである。また口頭伝承として伝達されていくにはこの会話はあまりに複雑すぎる。従って、何らかの伝承史的発展の過程、あるいは伝承の二次的編纂の過程を経ていると思われる。

しかし他方で35節で現在形の文章で導入された会話は、それと同じスタイルがすでにマルコの編集と見なした41節以下に引き継がれている。しかしその間にある36－39節の会話の導入文が過去形で作文されている。しかもその過去形の導入文の文体が ὁ δὲ εἶπεν αὐτοῖς (v.36) 乃至 ὁ δε Ἰησοῦς εἶπεν αὐτοῖς (v.38. 39) と οἱ δὲ εἶπαν αὐτῷ (v.37. 39) というように、統一的に作文されている。しかもその統一性はあまりに単純で機械的である。この統一性は時制の異なる35節と41節の間にあって、全体が一つの統一的な伝承であるという印象とつながる。

だが機械的でありつつも、全体に統一的な印象を与える導入文の作文の中で、イエスの言葉が38節及び39節bにおいては「イエス」という固有名詞を主格として2回繰り返しながら導入されていることが注目できる。それによってそれぞれ導入される言葉に重みを与えている。しかし同じ文体による二重の繰り返しはやはり不自然な印象を残す。そこで考えられるのは、この主格としてのイエスを明言する二つの導入文のどちらか一つが、元来伝承の中に一つだけあったイエスの決定的な言葉を導入する文章の二次的な複製であるという可能性である。

更に、会話の内容を考察すると、35節、36節で表明される質問者の願いにアポフテグマ的な単純さをもってなされるイエスの応答は40節の「イエスの右・左に座ることは定められた者のみ許される」という言葉の中にこそ見いだされ、38－39節の会話は質問と応答のつながりをそこなっている。それをはずすと質問と答えが「右・左に座る」という言葉で結ばれ、また時間的にも両者の間で

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

「あなたの栄光の時に」、つまり人の子としてのイエスの再臨の時の栄光（8：38；13：26）の時だけが問題となっている。それに対して地上におけるイエスと弟子たちの受難の時について語る38－39節は内容的に異物となっている。

すると考えられるべきは、Bultmann と同じように元来の伝承を35－37節、40節に求めることである。そして40節のイエスの言葉は元来38乃至40節にある ὁ δὲ Ἰησοῦς εἶπεν αὐτοῖς のいずれかによって導入されていたということである。このように再建すれば最初の質問はイエスの一つの言葉によって決定的に答えられるアポフテグマの様式が認められる。

時制が36節以下の導入文よりも41節以下のマルコの編集文に合致する35節の導入文にもマルコの手が入っている可能性がある。しかし προσπορεύομαι は新約聖書でここのみである。しかしＬＸＸ（＝70人訳旧約聖書）にも２回のみ（2 Ch 13：9；Tob 6：18）で、一般にも使用頻度は多くないが、伝承句とするにはあまりに単純な言葉であり、判断できない。質問者はゼベダイの息子たちである必要は必ずしもないが、いずれにしても「左右に座る」という動機から二人の質問者が必要とされる。従って35節冒頭に編集者の手が入っている可能性は残る(9)。

次に今、第一次的伝承と判断した35節以下及び40節を除いた、38節ａβ－39節の部分についてであるが、これは独立の伝承とは考えられない。検討すべき問題はこれはマルコ前の二次的拡大か、あるいはマルコ自身による拡大かである。Bultmann 他にみられるように、通常は前者とされる。しかし私はあえて後者の可能性を検証してみたい。

38節の οὐκ οἴδατε という表現はマルコ４回（4：13；10：38；13：33. 35）に対してマタイでは３回(20：22；24：42；25：13)、ルカでは１回(12：56)（なおヨハネ７回）であるが、マタイ３回のうちの１回はマルコ10：38対応であり、残り２回はたとえの結びにおかれた「応用」定式である。これに対してマルコのすべては弟子たちに向けて語られたものである。そのうち最初の２例は弟子の無理解を強調するマルコ的動機である。またマルコ13章における２例、特に33節は先立つ伝承群（v.28－29. 30－31. 32－33）と34－36節のた

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

とえを結合して、「目を覚ましているように」という弟子たちへの13章の主題を鮮明にする働きを担っており、編集者の意図を反映する。

τί αἰτεῖσθε は35節bの質問の中にあった *αἰτέω* を取り上げたものである。

δύναμαι は比較的マルコに多い（Mk 32回；Mt 24回；Lk 25回）。「*δύναμαι* ＋不定詞」の構文はわずかにマルコに多いだけだが（Mk 22回；Mt 19回；Lk 17回、なおJn 33回）、明らかにマルコの編集文と判断できるところにも登場している（7：24；9：28. 29；10：26など）。

πιεῖν τὸ ποτήριον ὃ ἐγὼ πίνω という表現は、マルコ受難物語の中で *ποτήριον* が2回登場（14：23. 36、なおMk 6回）し、特に14：33ではイエスが飲むべき杯は苦難の死を象徴しており、10：38での「杯」言及はその箇所との関連を打ち立てるものと理解できる。

これに対してマルコの筆と認めがたいのが、同様の表現でなされる *τὸ βάπτισμα* への言及である。受難とバプテスマとの関連づけはマルコには他になく、むしろルカ12：20を想起させて、伝承的表現であることを示唆する。恐らく *βάπτω*「沈める」の中に「死」の契機が含まれているのだろう。しかしこれによって伝承を想定するだけでなく、そのような伝承的表現がマルコにも知られていたと考えることもできる。

39節の弟子の応答とイエスの言葉は38節のイエスの言葉と逐一（ちくいち）対応したものとなっている。ここで注目できるのはイエスの受ける杯とバプテスマに関する表現は現在形で作文され、弟子たちのそれは未来形で作文されていることである。ここでのイエスの受難を現在に迫ったものとし、弟子の受難を将来のものとする構想は、イエスのエルサレムでの受難への歩みを描く中にはめ込まれた弟子たちの将来への指示である13章の時間的構想と合致する。特に13：9－13の弟子たちの運命がイエスの死と復活の後、彼が再び来るまでに経験するべき危難の中でイエスの後に従うことの指示となっている（8：34－9：1も参照）。この時間構想の共通性から、ここにマルコの筆を認めることができよう。

なお、イエスと弟子たちの会話という場面設定は8：14－21；9：9－13；

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

10：23－31などマルコが編集作業の中で好んで設定するものであることも、ここにマルコによるアポフテグマの拡大を想定することを支持する。

このような考察から、38－39節は、マルコ前の伝承段階での伝承の拡大であると考えるよりも、このアポフテグマを第３の受難予告の直後に配置したマルコ自身による拡大と想定することが妥当と判断する。

c．マルコ10：42ｂ－45

10：42ｂ－45のイエスの言葉には明白にマルコの手を示す用語や文体はみられない。従って、基本的に伝承が下敷きになっているとみられる。

下敷きとなった伝承を求めるとき、まず注目できるのは、43節、44節にある二つの ὅς ἄν の構文は様式的に独立の格言的な言葉伝承として存在できることである。新約聖書33回のうち、マルコ９回、マタイ９回、ルカ７回、ヨハネ１回と共観福音書への集中が顕著であり、マルコの場合では14：44以外はイエスの語る律法語となっている。

しかし現在では42節ｂ－44節までの言葉には種々の統一性が認められる。まず ἄρχειν (v.42) と πρῶτος (v.44)、οἱ μεγάλοι (v.42) と μέγας (v.43) という42節の言葉と43、44節の言葉との対応関係がある。更に ἐν ἡμῖν の43節ｂと44節における３回の使用も全体に統一性を与える。また42節の言葉の ὅιδατε ὅτι という導入と43節以下の言葉の οὐχ οὕτως δέ ἐστιν ἐν ὑμῖν という導入との間にも、周知の諸国民の支配関係と「あなた方の間で」の支配関係のあり方とを対比させる構造が作られている。従ってすでにマルコ以前において42節ｂ－44節は、この世の支配者と被支配者との関係との対比の中でイエスに従う者たちの中での「支配する者たちのあり方」を規定する教会規則を語る伝承として成立していたとみなしうる。つまりイエスの弟子たちの間で支配する者には διάκονος、δοῦλος としてのあり方が指示されているのである。

なお οἱ μεγάλοι と μεγας に対する43節の διάκονς の対応は自然であるが、ἄρχειν と πρῶτος に対する44節の δοῦλος の対応には若干不自

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

然な感じが伴う。むしろマルコ９：35における ἔσχατος による対応が自然ではないだろうか。ひょっとすると元来の ἔσχατος が後で、特に45節の言葉との関係で、δοῦλος に変わったのかもしれない。

以上のように、42節ｂ－44節の言葉は教会規則として一つのまとまりを見せている。言い換えれば45節の基礎づけの文章を必ずしも必要としていない。その意味で45節の言葉は伝承過程の中で二次的に付加されたものとみなされることができる。その際に45節全体がマルコの筆である可能性も考えられる。マルコは８：31の第一の受難予告の直後、９：12において自らの筆で受難予告伝承から苦難の要素だけを取り出した人の子言辞を創作している(10)。同じことが10：45についても考えられる。

それでもやはり45節に伝承を想定するとしても、45節の言葉は、42節ｂ－44の基礎づけとして考えるときに、その目的は διακονῆσαι までで果たされ、それに対して45節ｂは余分であるとの印象を与える。ここに伝承の発展、乃至編集上の付加が考えられる。

実際、共観福音書の「私が来た（ἦλθον）」言辞、乃至「人の子が来た（ἦλθεν ὁ υἱὸς τοῦ ἀνθρώπου）」言辞の中に、「Ａでなく、Ｂ」という構造を持つものを探すと、それらは οὐκ ἦλθον A, ἀλλά B という構造で完結しているのが一般的である(例えば Mt ５：17；Mk ２，17 / Mt ９：13；Mt 10：34)。するとここでも人の子言辞の基本的構造としても45節ｂなしで完結することがむしろ期待できる。

更に本来の διακονέω という言葉自体の中には、ルカ22：24－27でそうであるように、「生命を捧げる」ことまでの内容は含まれていない。すると「仕えるため」と「自分の生命を与えるため」との間に、一定の非連続性が認められる(11)。

もう一つの反駁として、マルコ45節に対応する言葉を含む前述のルカ22：24－27、特に28節ｂの存在が指摘されよう。この場合の問題はルカの箇所がルカの伝承に基づくものか、あるいはマルコ10：35以下を省略したルカがこの場面で、マルコ10：35以下とマルコ９：33以下にならって、自ら創作したのではな

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

いかという問いと関わってくる。研究の中ではBultmann他によって独自の伝承を想定する味方が一般的である。しかしルカの編集を見る見方もある。私も検討の結果、ルカによるマルコ素材の編集であるとの結果を得た。しかし紙幅の都合上、省略する。

では45節ｂ自体が本当にマルコの特色を示すだろうか。δίδωμι と φύχη のマルコにおける使用頻度は共にマタイとルカに比べて少ない（前者 Mk 35回；Mt 54回；Lk 54回、後者 Mk 7回；Mt 11回；Lk 12回）。しかしそれでもマルコにおける7回の φύχη のうち、12：30以外で受難への道を歩むイエスと彼に従う者たちの φύχη について語り、その意味で受難予告以降の物語のキーワードの一つと言いうる。特に8：34以下での4度にわたる φύχη の使用、更には受難を前にした14：30での φύχη の苦しみの表明との関連がここで打ち立てられている可能性がある。

λύτρον はＬＸＸで20回使用されるが、新約聖書ではマルコ10：45とその平行箇所マタイ20：28のみである。更に1テモテ2：5－6の信仰告白伝承にある45節ｂと非常によく似た表現（ὁ δούς ἑαυτόν ἀντίλυτρον ὑπὲρ πάντων）の中に ἀντίλυτρν があり、ここでの45節ｂの表現との伝承史的関連性をうかがわせる。もしこれが認められると、45節ｂは一定の信仰的内容を表明する伝承定式となる。

しかし他方、同様の表現はキリスト教伝承の枠を越えて、一般的に使われていることが指摘できる。例えばＬＸＸの中で「δίδωμι ＋ ἑαύτον ＋目的を表す不定詞」の構文(1 Makk 6：44)や「δίδωμι＋ψυχάς ὑμῶν＋ὑπέρ＋属格」の構文（1 Makk 2：50）が一般的な意味で「生命を捧げる」という意味で使われている。更に「δίδωμι ＋ λύτορον ＋名詞属格」の表現がＬＸＸには6回見られ（Lev 19：20；Num 3：48. 51など）、それらはすべて一般的な意味で「（～の）の賠償金を支払う」という意味である。特にＬＸＸ出エジ21：30；30：12などでは「δίδωμι ＋ λύτορον に φύχη の属格」が添えられて、やはり一般的な意味で使われている。またＬＸＸ民数3：12には「λαμβάνω ＋ λύτρον(複数4格) ＋ ἀντί ＋ πᾶς（単数2格）＋名詞2格」

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

の構文があり、「代償を支払う」という意味に留まる。（他にヨセフス、古代史14：107（λύτρον ἀντὶ πάντων）参照。）このような用例を見ると、45節bの表現は伝承を下敷きにしないでも十分に可能な作文である。またそれは犠牲祭儀と結びついた「贖罪」的含蓄とは無関係に、本来の語義（「解き放ち金」（Lösegeld））に即して用いられた表現である。

前置詞 ἀντί はマルコではここだけであり、マタイ、ルカ各4回の頻度に比べて少ない。しかし一般的な用語である。また新約聖書20回の用法の中で、特に伝承定式の中で好んで用いられているとは言えず、むしろ伝承定式の中に多く使われる ὑπέρ でなく、ἀντί がここで用いられていることは、伝承が下敷きになっている可能性を否定しよう。

πολύς が男性・女性の複数で使われるのはマルコで10回であり、マタイ、ルカ（各16回；12回）に比べて少し少ない。πάς の同様の用法でもマルコは比較的少ない（Mk 7回；Mt 26回；Lk 32回）。これも一般的な言葉であるが、しかし1テモテ2：6との関係で言えば、πάντες ではなく、πολλοί がここで用いられていることは重要な相違である。πολλοί と πάντες との間には当然ながら明白な区別があり、両者はマルコの文脈でも区別されていると思われるからである。例えばマタイ12：15において両者が区別して用いられている。マルコにおいても πάς は1：32、7：3において全員を包括して用いられている。それに対して πολλοί 乃至 πολλαί はマルコ2：15、6：31、15：41などにおいて「大勢の人々」というように数の多さを強調して用いられている。そして2：15、そして特に15：41においてガリラヤにおいてイエスのあとに従う人々、更にイエスに従ってエルサレムに上ってきた人々を表すときに用いられている。大勢の人々が群衆としてイエスのまわりに群がっては去るだけでなく、広義の弟子としてイエスのまわりに集まり、イエスのあとに従っていた（3：7－4：34参照）。するとここでの πολλοί の選択はマルコの自覚的な作業である可能性がある。そこで10：45での πολλοί の具体的内容としては、最も近い文脈の中でいえば、10：32で3人称複数の動詞 θαμβέω の明示されていない主格である不特定の人々から区別されていると

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ころの、「あとに従う人々」（oἱ ἀκλουθοῦντες）と「12人」にかけることが考えられる。しかしその範囲はもっと広く考えられていよう[12]。

以上の分析が正しいとすると、マルコが手にした伝承は10：35〜37.（38aα）.40と10：42b〜44（45a）の二つである。マルコはこの両伝承を10：41〜42aの作文によって一つの場面に統合し、更に10：38bβ〜39によって最初のゼベダイの子たちとの会話を拡大し、また結びのイエスの言葉に45(a)bを付加したこととなる。

2．編集意図の考察

大略、二つの伝承を編纂して10：35－45の段落を形成したマルコの意図はいったいどこにあるか。

(1) まず問わねばならないのは10：35－38aα．40の伝承の中に38節aβ－39節を挿入した意図である。

この挿入によって様式的にはアポフテグマから複雑な会話となり、内容的にも本来の伝承には全くなかった要素が組み込まれることになった。

35－37節における弟子たちの関心は「あなたの栄光の中で」、即ち8：38、13：26と同じくここでも再臨の人の子としてのイエスの来臨の時に、その右と左に座るところにのみ向けられている。これはエルサレムへの道をイエスが予告して以来、弟子たちに一貫する関心である（特に9：33以下）。伝承の問いと答えの中で話題となっていたのもこの終末論的栄光の中でイエスと共に支配者として君臨することである。

しかしその中に38節aβ－39節を挿入することは、イエスにとっても、その後に従う弟子たちにとっても、終末論的栄光への道はただ受難の道を通してだけであることを明らかにすることである。つまり終末論的栄光の前に受難を置き、終末論的栄光と受難を関係づけ、そして受難を通して、そして受難の中にこそ終末論的栄光への道があることを告げている[13]。

(2) マルコはまたイエスが杯を飲み、バプテスマを受ける時間レベルとは区別しながら、将来のこととしてイエスを本質的に誤解している弟子たちがやがて

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

自らイエスと同じ苦難の道を歩むことを、イエス自身の口によって予告させている。これは特にマルコ13章の中で示される、イエスの死と復活の後、再び彼が来るまでの時間の間に、イエスを見捨てた弟子たちが、再びイエスと同じ道を歩むことを通して、福音を全世界の全民族の元にもたらすことを告げていることと共通する。

私は、マルコにおいて弟子たちはイエスから厳しく無理解を叱責されるが、実は彼らはその無理解を越えて、復活後の福音宣教の担い手になっていき、その意味でマルコ福音書の主役はイエスであると共に、弟子たちであると考えているが、そのことがここでも明らかとされている。

(3) 42節から44節の言葉は、一般世界の支配者に対して厳しい対比の中で、イエスに従う者たちの間での支配者のあり方を全員の仕え人・奴隷と規定していくラディカルなイエスの勧告である。この勧告は、この12人が間もなくイエスの残していくことになる人々の間で支配者的な立場に立つことを前提している。

だがこの勧告に留まる限り、この言葉は9：33以下と大きく変わるところがない。しかしこの言葉に45節の人の子言辞が付されることによって、この人の子言辞と先立つ10：32以下の受難予告とが呼応しあうようになって、この35－44節にあるイエスと12人との会話を前と後から取り囲み、それによって間もなく始まるイエスの受難の歩みが、弟子たちが習い、後に従うべき「仕える姿」の模範となるべきことを告げる構成となっている。

マルコは伝承素材である8：31の受難予告を9：12で自ら言い表して、受難予告伝承が本来苦難から復活までを展望していたのに対し、特に苦しみと恥辱の側面のみを取り出して強調した。ここでも10：45節の人の子言辞はマルコは10：32以下でイエスが後に従う者たちからも切り離して特に12人に対して語った第3の受難の予告と呼応しあって、10章35節から44節のイエスと12人の間の会話の枠を形作っているといえる。

(4) この10：32以下の受難予告は、イエスの死は、人の子としてのイエスがエルサレムのサンヘドリンを構成するユダヤ教最高指導者たちに引き渡されて、彼らがイエスを死に値するものとしての決定を下し、彼らがイエスを異邦人た

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ちに引き渡し、そして実際に異邦人たちがイエスを殺すものとして語っている。従って、第一、第二の受難予告（8：31；9：31）と比較して、第3の受難予告は、イスラエルの救い主を拒否し、イエスを殺す過程の実際の主体はエルサレムの最高指導者たちであることを浮かび上がらせる構図をもっている。

この構図はマルコが11章から13章におけるイエスの三日間のエルサレムでの働きを描く中で作り出しているものと同じである。つまり、マルコが彼らによるイエス殺し決定（11：18）をイチジクの木の呪いとその成就であるイチジクの木が根から枯れたことを発見する物語で枠づけたことである（11：12－26）。更に最高指導者たち、つまり10：33であげられた三者がイエスを殺す口実を求めて登場したときにイエスが答えられた物語の中で、ブドウ園の主人が最後に派遣する愛子の農夫たちによる殺害が、主人の激しい怒りを招き、彼らは殺され、ブドウ園は他の人々に渡されることが告げられることである（11：27－12：12）。そしてついには、そのような枯れたイチジクの木の発見で始まり、最高指導者と彼らの派遣した人々と対決した一日が終わったときに、エルサレム神殿を見下ろしながら語られる神殿の根本的な破壊の預言が置かれ、その後、イエスが残していく弟子たちのためにする長い遺言的説教（13章）の中で将来の弟子たちによる全民族の下での福音宣教が語られる（13：10）ことである。

すると45節bで言われる「多くの人々」とは、このようなマルコ福音書のマクロな文脈の中では、ガリラヤでのパリサイ派やエルサレムの律法学者など、イエスを拒絶し、彼に聞かない人々とは区別された、大勢の人々、つまりすでにガリラヤにおいてパリサイ派のイエス殺し決定直後にイエスの周りに参集した大群（3：7以下）、そして更に2回の給食の対象となった大群（6：30以下、8：1以下）が象徴的に示し、また今はエルサレムに上るイエスの後に12人と一緒に従う人々の集団が示唆している人々と考えることが可能であろう。それはやがて復活節後に弟子たちが全世界の（14：9）全民族の間で（13：10）行う福音宣教に聞き、共にイエスが宣教した神の支配に生きようとする人々をも包括しよう。ただし、この解釈については、更に多面的に論じなければ、理解を得られないものと認識している。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

(5) 今まで触れてこなかった重要な問題に45節bとイザヤ53章の苦難の僕との関係の有無がある。C. Westermann によればイザヤ53章、特に53：12には贖いの犠牲の動機を持つ代理の死の思想が表明されているという。12節の「彼が彼の生命（乃至「血」nephesh）を死の中に注ぎ出した（ausschütten）ことの代わりに」という文章が贖いの犠牲を想起させることとそれが53：10の祭儀用語「罪の償いの捧げもの」（ אָשָׁם ）と対応するからである。更にこのイザヤ53章とマルコ10：45の関連が頻繁に言われるのは、53：11－12ＬＸＸでは繰り返し πολλοί について言及され、また特に12節には ἀντί ＋属各と παραδίδωμι（受動態）＋ εἰς θάνατον ＋ ἡ ψυχὴ αὐτοῦ（主格）の組み合わせが見られるからである。

しかしマルコ10：45ｂにおいて重要な λύτρον 概念についてはイザヤ53章には何らの痕跡もない。もちろんイザヤ53：10の「罪の償いの捧げもの」（ אָשָׁם ）が λύτρον の背景であるとの主張がある[14]。しかし最近新たにイザヤ53章をマルコ10：45ｂの背景に認めようとする B. Kollmann ですら、Barret の「旧約における אָשָׁם 46例の内のどれもがＬＸＸにおいて λύτρον でもって訳されていない」という言葉を引用して、この主張を退けている[15]。F. Hahn は一方で Barret を批判するが、もう一方でイザヤ53章とマルコ10：45の言語的対応関係のもろさをも認識し、両者の対応は用語よりも、事柄・内容によるものとしている[16]。その際にイザヤ53章の多くの人たちの「罪」概念を重視する。しかしイザヤ53で重要な役割を演じる「罪」概念（ ἁμαρτία ἡμῶν／πολλῶν ）は少なくともマルコ福音書の中では洗礼者ヨハネの宣教とマルコ２章冒頭の治癒物語との関連で局地的に、伝承の範囲内で用いられるのみで、しかも個人の個々の具体的な罪責を指して言われているのみである。従って私には、イザヤ53章を直接マルコ45節ｂの背景とすることは（Kollmann も含めて）説得的でないままに留まる。

それでもなお10：45において「あがない」動機について語るとしたら、λύτρον の根本義に立ち返りつつ、「罪」や「祭儀」概念を持ち込まないで言われる「多くの者たちを（自らの生命を代価として）買い取る」というレベルに

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

おけるあがないであろう。これについては14：24の関連で更に深めて論じる。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

【注】

(1) 本論文は日本新約聖書学会第36回大会（1996年９月17、18日　於　同志社大学）において口頭発表したものである。当日は時間の制約の下でマルコ10：35－45の部分のみを発表し、14：22－25については一部紹介するに留まった。今回も紙幅の都合で、まず10：35以下の部分に限定し、残りは次の機会に委ねたい。

(2) 例えば、川島貞雄『十字架への道イエス』（1984年教文館発行）では一方でマルコにおけるイエスの生と死が他者に仕える方向性をもつものととらえられると並んで、他方で、特にマルコ10：45との関連で「贖罪」について語られている（特に249ページ参照）。

(3) 「罪」について、マルコでは個別的な罪や罪人について語られるのみである。むしろガリラヤのパリサイ派などイエスを拒絶する人々、エルサレムのユダヤ教指導者など、イエスを殺す人々、十字架への道をイエスに従うことができなかった弟子たち、更に立場の曖昧な群衆の中に罪的なものを見いだすが、それらの事柄は罪・贖いとは別のコンテキストにあると考える。

(4) W.Wrede, Messiasgeheimnis, [4]1969.

(5) J.Gnilka, Das Evangelium nach Markus, Bd.1, 1978(EKK), S.165.

(6) G.Strecker にもマルコ福音書はイエスの死の叙述に留まらない展望をもつことについて類似の認識が認められる。特に G Strecker, Theologie des Neuen Testaments, Berlin 1996, S. 381f.

(7) R.Bultmann, Die Geschichte der synoptischen Tradition, 1970, S. 23, 70.

(8) J.Gnilka, Das Evanglium nach Markus, Bd.2 1979(EKK), S.99.

(9) 以上の伝承の再建に対して残された問題は、Gnilka も指摘している「左」を表す言葉が37節の ἀριστερός から40節の εὐώνυμος へと変わっていることである。この変化の説明は十分にはできない。あえて言えば、εὐώνυμος がマルコ15：27においてイエスの右左に十字架につけられる

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

人について言及されるときに同じく δεξίος と共に用いられていることが注目できる。35－40節は現在の形では元々の伝承の中にあった人の子再臨時の右左に座るという事柄と、38－39節による二次的拡大によって受難者との関連での右左という事柄とが混合されている。この受難動機の導入と「左」の15：27と同じ用語への変化に関連があるかもしれない。

(10) 拙論「受難への道を歩むイエス・ユダヤ人指導者・群衆について－マルコ福音書8章11節～9章13節の編集史的研究」、『神学研究』38号（1991年）123頁～143頁所載参照。

(11) この解釈に対して、イエスの「死」解釈の原点に彼の生の中にあった διακονέω という生き方があり、それが最後の晩餐の記憶の中で解釈されていったというE. Schweizerの示唆する可能性が指摘されよう。検討されるべき課題である。しかし私はここではその可能性を理解しつつも、そのようなイエスの死解釈は、マルコがイエスの生と死の伝承を総合する段階でこそ深められた可能性もあることを示唆しておきたい。

(12) これについては後述。なお、G.von Rad, Theologie des Alten Testaments, Bd. 2(1980), S. 265, Anm. 33は、イザヤ52：13～53：12の「苦難の僕の歌」内に4回登場する「多くの人々」（πολλοί）は、排外的（exklusive）な意味で「大勢、しかし全員ではない」ではなく、包括的（inklusive）な意味で「全員」であるとする。つまり πολλοί と πάντες との間に意味の相違は認めていない。

(13) この編集作業はマルコが8：27－9：13において一方で8：31の受難予告と9：2以下におけるイエスの天的栄光の啓示とを関係づけ、しかも9：11－13によって弟子たちがこの天的栄光を受難なしに理解することを拒否したことと共通する。

更に8：34－9：1において従う者たちの終末論的栄光は、それに先立つ現在において十字架を追ってイエスの後に従うことと本質的な関係を持つことを示したことと共通している。

(14) H.J.Wolf; J.Jeremias; E.Lohse; F.Hahnなど。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

(15) B.Kollmann, Ursprung und Gestalten der frühchristlichen Mahlfeier, 1990(GTA43), 178.

(16) F.Hahn, Christologische Hoheitstitel [3]1966(FRANT 83), S.57ff.

NII-Electronic Library Service